

「新書大賞2018」贈賞式

前野ウルド浩太郎さん

「新書大賞2018」（中央公論新社主催）の贈賞式が9日、東京・大手町の中央公論新社で行われた。

受賞作『バッタを倒しにアフリカへ』（光文社新書）の著者で昆虫学者の前野ウルド浩太郎さん(38)＝写真＝は、「今後は良い論文をどんどん書き、バッタの専門家として世界で認められる存在になりたい」と語った。前野さんは、世界でも数少ないサバクトビバッタの研究者。2011年から3年間にわたってモリタニアに滞在し、サハラ砂漠で研究を続けた。名譽ある「ウルド」というミ

バッタ研究 決意新たに

ドルネームを贈られるなど、現地での信望も厚い。本書では、ほとんど知られていないバッタの生態だけでなく、途中、無収入の境遇に陥りながら研究を続けた苦労が赤裸々につづられ、自然相手に奮闘する研究者の実像を知ることができる。

現在は国際農林水産業研究センター研究員。「研究成果を論文として発表する前に、一般書で注目を集めてしまいい、うれしいと同時に恥ずかしい」と話すが、「専門的な研究と並行して、一般の人に興味を持ってもらえるような活動も続けていきたい」とも。

バッタは大発生すると農作物を食い荒らし、大きな被害をもたらす。予防のためにも研究は重要だ。今日のバッタ研究は遺伝子解析が中心だが、「大発生のメカニズム解明には砂漠での観察が欠かせない」。ファールブルに憧れて昆虫研究の道に進んだ「バッタ博士」は、「ファールブルのようにペンとノートを武器に、研究に取り組んでいく」と決意を新たにしていた。（文化部 松本良一）

